

の火を以て内を見る。七左衛門と盗人、目と目を見合せたり。盗人は其の儘川上の方へ逃ぐる。七左衛門刀を抜き放して、橋の少し此方にて袈裟懸に切りたり。手こたへすといへども、川中へ飛びおりたり。七左衛門は川端の道を直に行く處に、向より一人來て七左衛門に抱き付、何を被成哉と云うて七左衛門を川中につき落し、何くともなく逃げたり。最前の者は川の上り立に倒れて死し居たり。其の後七左衛門家に二三度火を付るといへども、早く見付け焼け上らず。不思議なる者七左衛門が家の邊を徘徊せしを、七左衛門捕へたり。能く仕たりとて、城州より加増を遣す。城州死後に此の事微妙公開召され、召出されたり。後に聞けば、右切殺されし者は、盗人次郎兵衛が甥也。七左衛門に抱き付きたるは、次郎兵衛が師匠也。天王彌五郎をして金澤中をありき、能き處を見立てさせ、盗をしたるは此の老人なりと後に聞たり。七左衛門家の内を火にて見たるも師匠の老人也。大髯の六十七、八の男也。次郎兵衛と同道して欠落ち、越後柴田へ行きたり。此方より柴田へ届有つて、召捕へんとせしに町の土藏へ取籠り、妻子并に師匠

の老人をも次郎兵衛切殺し、次郎兵衛は鐵炮にて自害すといへり。按ずるに、右横山山城守邸地の下町近所川端の片原町といふは、欠原町の如く聞ゆれど、川端或は川中などあるは如何。若しはがけ下の地なるか、尙追考すべし。盗人次郎兵衛は御小人次郎兵衛が事にて、寛永の頃高名なる盗也。御小人町の條に載す。

○寶林山棟岳寺

曹洞宗也。貞享二年由來書に云ふ。當寺開山は越前國坂井郡本庄龍雲寺開山大空支虎和尚の嗣法東木長樹和尚。明應元年越前國中條郡の郡主赤座但馬於新道村建立。但馬末孫赤座備後、利長卿被召寄、當國金澤居住に付、當寺八代南室和尚も金澤へ引越、慶長八年備後下屋敷内に寺建立之處、備後子息永原土佐、利常卿小松へ御隠居之節、小松へ被召連に付、金澤之下屋敷被召上。依之當寺之寺屋敷茂被召上、寺地無之に付土佐より訴訟申上。慶長二年小立野に於而寺屋敷拜領被仰付造營。九代大蟲和尚、雪舟之正筆三幅對利常卿へ献上仕處、其後利常卿より黄金拾枚拜領被仰付。十代德州和尚に至り右黄金を以寺再建仕と云々。右

棟岳寺の隣地は、檀頭永原氏の邸地也。延寶金澤圖に、永原權大夫前口二十七間奥行三十三間二尺とあり。權大夫は赤座備後の曾孫にて、永原土佐の孫也。權大夫孝好より代々相傳して此の邸地に居住し、廢藩の際退去す。

○嫁 坂

元祿六年の土帳に、嫁ヶ坂とあり。今はよめさかと呼べり。國事昌披問答に云ふ。或老人の物語に、篠原出羽の娘を本庄主馬方へ嫁娶せし時、此の坂を新たに作り廣げ、此の道より婚禮あり。依之嫁坂と名付くと也。眞偽を知らず。此の坂其の以前は、通路有りなしの細道なるを作り開きし由也。

主馬屋敷は今石浦新町の末足輕町也。此の頃大乘寺坂は未だ無之哉。といへり。平次按ずるに、本庄主馬は千八百石にて、元和六年の土帳に鉢將とあり。後に乞骸して京へ去る。今金澤主馬町は即ち主馬の第地と云ふと三州志驢餘考にいへり。主馬町は主馬殿町とも呼べり。百姓町慶覺寺の横小路なり。此の地鐵炮組の輕卒の組地なり。そのかみ頭なる本庄主馬も、組子と共に此の地に第地を賜はり居住せしにや。但し三州名跡誌には、昔邪見なる姑有りて嫁を

谷へ落し殺しける故に、嫁殺坂と云ふべきを略して嫁坂といふとあり。何れか正説なりけん。按ずるに、貞享三年五月綱紀卿御尋に付言上書に、河北郡神谷内村領往還道筋三つ屋と云處、百年許以前に才田村より海老を持出る者を切殺すに依つて、此所をわび殺しと申傳ふといふ事見たり。嫁殺坂の名も其の類名ならんか。

○嫁 坂 町

此の町は、嫁坂の道路に家居するを以て呼べり。元祿九年の地子町肝煎裁許付に、小立野嫁坂町とあり。國事昌披問答にも、新坂町、嫁坂町と載せたり。按ずるに、金澤町會所留記寛文十一年九十歳者書上帳に、小立野嫁坂こんや八郎兵衛など、記載し、寛文の頃既に此の坂路に家屋を造作せし事知られけり。今も町名を嫁坂、新坂など、呼べり。

○中 坂

此の坂は、嫁坂と新坂との中間なる坂路なり。故に中坂と呼べり。

○中 坂 町

此の町地は、中坂の坂路に建て並べたる小家共の間を呼べ